

『グラン・トリノ』

2008年／アメリカ／クリント・イーストウッド監督作品

イーストウッドが示した矜持

会員 高須賀 康秀 (65期)



『グラン・トリノ』
ブルーレイ ¥2,381 +税
DVD ¥1,429 +税
ワーナー・ブラザーズ・ホーム
エンターテインメント

1 あらすじ

妻に先立たれ、一人暮らしの頑固な老人ウォルト・コワルスキー。彼の唯一の楽しみは、大切にしている愛車グラン・トリノを磨き上げ、そして眺めることである。その宝物を盗もうとしたのが隣に住むモン族のタオだった。ウォルトがタオの謝罪を受け入れたときから、二人の不思議な交流が始まる。学校にも行かず、自分の進むべき道が分からなかったタオが、ウォルトから与えられる労働に従事するうちに、男としての自信や労働の喜びに目覚めていき、ウォルトもまた、タオを一人前の男にするということに、生きる喜びを感じ始める。

しかし、タオは不良グループからの嫌がらせや争いから、家族とともに命の危険にさらされる。タオとその家族を守るため、ウォルトがとる行動とは…？

2 ウォルトとイーストウッド

本作は、一人の少年の成長談としてももちろん面白い。タオが労働に従事している様子を自宅のテラスから煙草をふかしながら眺めるウォルトの視線は優しく、美しい。しかし、本作を決定的に傑作たらしめているのは、このウォルトという主人公をクリント・イーストウッドが演じているという点にある。

ウォルトの人生のピークは、フォード社でグラン・トリノを自ら作ったという1972年に象徴される。その頃は、アメリカ車がまだ輝きを放っていた時代である。しかし、アメリカ自動車産業の衰退とともに、かつての同僚たちは姿を消していった一方、モン族を始めとする多くのアジア系の移民が住みはじめ、同時にウォルトの家の周りは荒れ果てていく。つまり、ウォルトや

グラン・トリノは古き（良き）アメリカの象徴として描かれている一方で、急速に消えつつある古き（良き）アメリカの象徴としても描かれているのである。

一方、イーストウッドは、本作公開時78歳であり、ウォルトとまさに同世代。また、俳優としての名声は「ダーティハリー」シリーズ（1971～88）で確立したが、同時にその頃は古き良きアメリカ映画が終焉を迎えつつある時期でもあった。

ウォルトとイーストウッドを重ね合わせながら本作を改めて見直すと、ウォルトのとる行動の意味とエンディングがより味わい深いものとなる。

3 劇中で流れる音楽

本作では、音楽の挿入は極めて抑制的で、劇中ではほとんど流れない。その効果もあって、エンディングで流れる、音楽の美しさは際立つ。そして、その美しい音楽をバックに、画面に映し出されるグラン・トリノを運転するタオの表情。そのタオが運転するグラン・トリノが道の向こう側に去っていき、その後他の車がその道を通り始めるタイミングやその数。そのあまりの美しさや余韻に、劇中、エンドロールが流れ終わった後も、私はしばらく椅子から立ち上がることができず、ただただ圧倒された。本作を映画館で見ることができて、本当に良かったと思う。

4 最後に

以上、いろいろと書き連ねてきたが、書き終わった今でも本作の魅力を十分に伝えることができたか、全く自信はない。百聞は一見にしかず、ぜひご覧いただきたいと思う。